

名家書簡披展：その五

雅俗の会

<https://doi.org/10.15017/4741898>

出版情報：雅俗. 5, pp.191-216, 1998-01-10. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



名家書簡披展

連載 その五

雅俗の会

本号は、中野三敏氏所蔵の書簡の内、平野五岳六通、草場佩川三通、他五通の計十四通を掲載する。書簡は軸装されておらず、それぞれ独立したものであるが、便宜上五岳の書簡に一〇六、佩川の書簡に七〇九、その他の書簡に十〇十四の番号を付した。五岳と佩川の伝についてはここで一括して述べることにする。

平野五岳は僧侶・詩人・画家。名岳、字五岳、別号古竹園・竹邨方外史など。聞恵と称す。豊後日田の人。渡里村長善寺の前房正念寺に生まれ、八歳の時に竹田村願正寺の前房専念寺の養子となり、後に第六代住持となる。十一歳の時、咸宜園に入門。十五歳で客席に転じ、その在籍期間は短いが、詩才は師広瀬淡窓にも高い評価を受けている。また、画業は三十歳の頃から本格的に取り組

み、日田県知事松方正義を通じて大久保利通ら明治政府の中心人物達に紹介され、明治六年のウィーン万国博覧会への出品、同九年の明治天皇への画の献上などにより、全国的な名声を得る。詩・書・画に優れた「三絶僧」と称される。文化六年三月二十六日生、明治二十六年三月三日没、八十五歳。

草場佩川は佐賀藩儒・漢詩人。名韓、字棟芳、通称瑳助、別号玉女山樵・濯纓堂など。初め珮川と号し、後佩川と改める。肥前多久の人。八歳で東原庵舎に入学、十八歳で弘道館に入学して古賀穀堂に学び、二十三歳で江戸に出て昌平黌に学び、穀堂の父精里に入門する。多久侯に仕えると共に、佐賀本藩の儒官となり、弘道館の教授となる。晩年は幕府から昌平黌へ招聘があるが、病身

を以て辞退する。画は江越繡浦につき、南蘋流を学び、後南宋風に転ずる。著作に『佩川詩鈔』四巻などがある。天明七年一月七日生、慶応三年十月二十九日没、八十一歳。

※参考文献 専念寺『専念寺所蔵五岳上人遺墨遺品集』（平成四年）、渡辺瑞子「平野五岳年譜」（『デ・アルテ』二・四号、昭和六十一・六十二年）、三好不二雄・三好嘉子『草場佩川日記』（昭和五十五年三月、西日本文化協会）、細川章「草場佩川の年譜と著作について——草場家資料を中心に——」（『西南地域史研究』一号、昭和五十一年）

〔付記〕五岳及びその養子猶山について御教示を賜った専念寺、佩川の日記に関して御教示を賜った多久市郷土資料館に、心より御礼申し上げます。

（関澤 智子）

一 平野五岳

昨日ハ御賁臨被下候得共、何ニも無之、甚奉恐入候。乍併、緩々拝晤難有奉存候。

一、先日差上候内、悪金十両之かわり差上申候。御入手可被下候。此内ニも油断不成候。御吟味可被下候。匆々頓首

十一月八日

花溪様

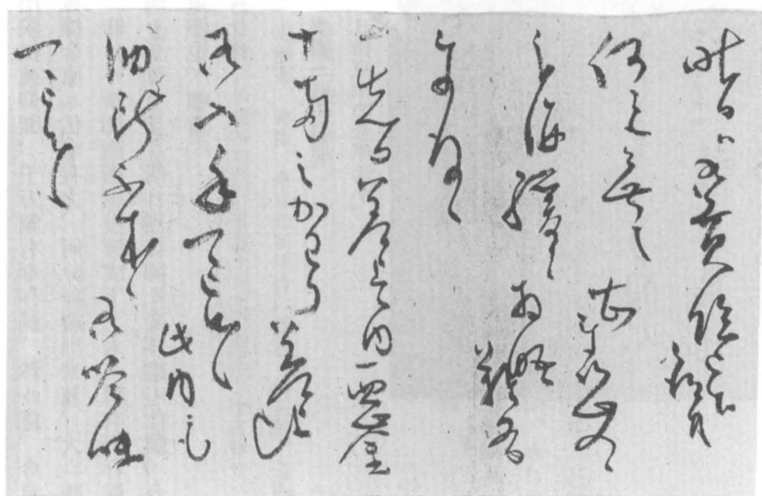
梧右金子添

五岳

註1 千原華溪。商人。通称幸右衛門、諱鎮信。豊後日田の人。

掛屋兼用達の丸屋の当主の座を兄夕田から譲り受け、家業に従事するかたわら画をよくした。兄と共に五岳に親炙した。

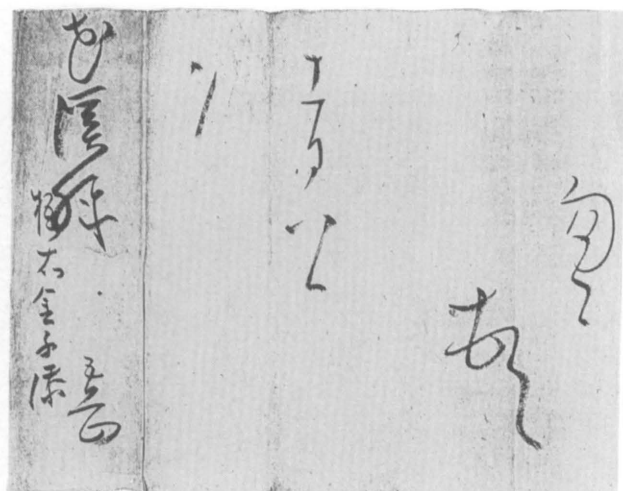
天保三年七月十五日生、明治三十七年二月二十六日没、七十歳。



(165×574mm)

花溪¹
様
拝復

二 平野五岳



五岳

尊書忝奉拝見候。玆今日ハ湯豆腐ニテ御催之由、小子へも罷出候様被仰聞、千万難有奉存候。然ル處、今日ニ限り、無據合原ニ仏事有之、何分拝趨出来兼、大ニ残念奉存候。昨日ハ新御酒御恵投被成下、大ニ難有奉存候。イツレ何ヤラカヤラ、明日当日御礼旁拝趨可仕候。今日ハ誠ニ遺憾也。頓首

十月廿日

註1 書簡一註1参照。

2 日田豆田の合原氏か。

(165×568mm)

三 平野五岳

花溪¹様

拜復

五岳

堤氏より参候統地并ニ扇地²、慥ニ落手仕候。近日中相
認可申候。今日ハ合原より御招待申上候由、承り申候。
小子も御相伴に被招申候。先□御約束申上候得共、風雪
にて不思議仕候。御有恕可被下候。頓首

九月二日

註1 書簡一註1参照。

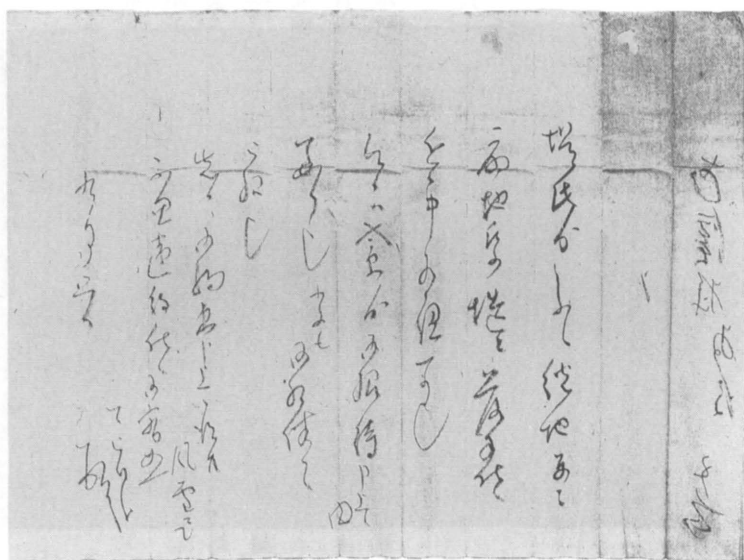
2 堤静斎。幕臣。東京知新学舎の儒官。名正勝、通称十郎、

字威卿。広瀬淡窓門。文政十年生、明治二十五年十一月十三

日没、六十五歳。

3 書簡二註2参照。

4 原簡破れ。



(243×340mm)

四 平野五岳

奉拝見、嘸御退屈奉察入候。御光来可被下候。忝ニ茶ナ
リトモ煎サセ可申候。拙書畫ハ御見物ニハナリ不申候。
私ハ失敬ナカラ二階ニテ相認可申候。今日ハ落款ナト重
々仕候。御覽被下候而も御慰ニハ相成不申候。龜茶ヲ煎
可申候間、何卒御光臨可被下候。頓首

十六日

橘智隆様

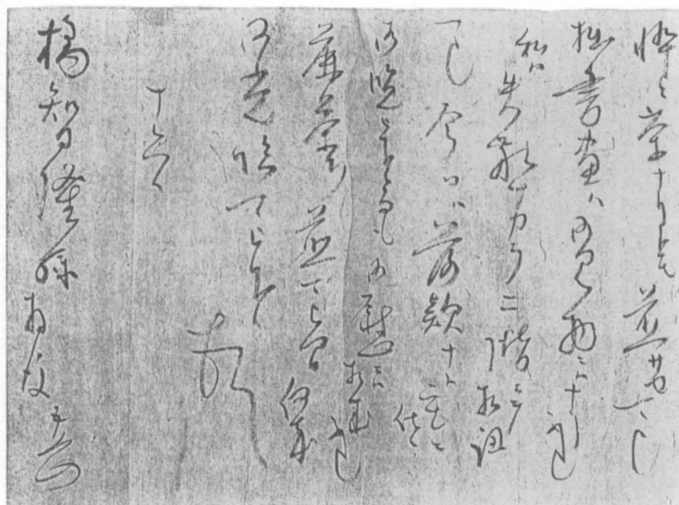
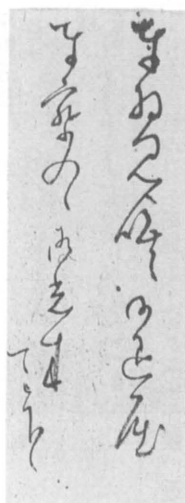
拜復

五岳

註1 五岳の養子猶山。五岳の義弟無染の第二子で、文久二年に

十六歳で五岳の養子となる。後専念寺第七代住持となる。弘

化四年生、明治三十四年一月二十三日没、五十五歳。



(161×275mm)

五 平野五岳

為拙畫山水二枚潤筆、金五千疋御惠投、難有拝受仕候。
頓首

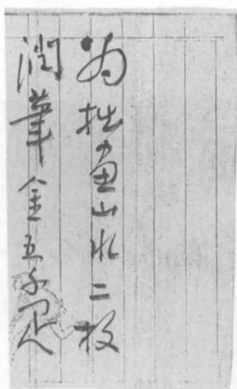
九月二十日

伊東令助様

五岳(印)¹

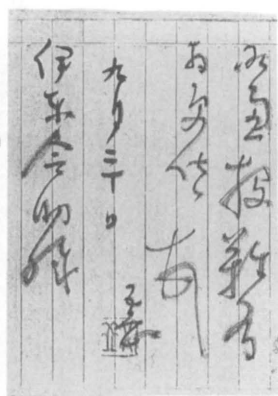
註1 朱文方印(五岳)。縦一・六釐、横一・五釐。『平野五岳

展図録』(平成四年十月)の「印譜」によれば、本印は安政四年頃遊印に、以後は款印として晩年まで多用されている。



(148×225mm)

六 「平野五岳」

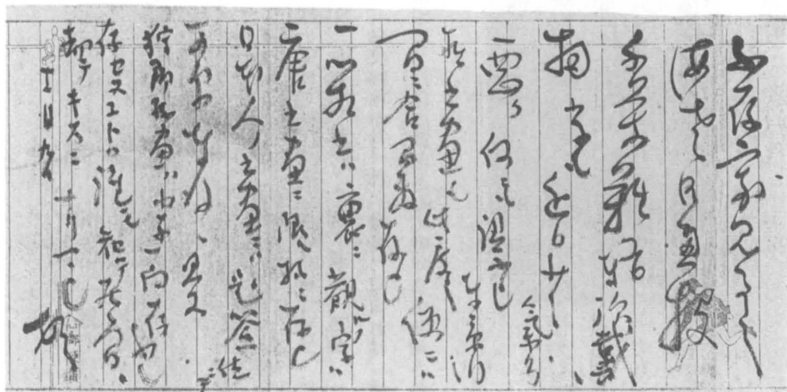


不存寄見事之海老御惠投千萬難有奉頂戴候。扱小子も近日少々氣分悪ク何にも認不申候。東京行之拙書畫も此度之便ニハ間ニ合間敷存申候。

一、箱書ハ裏ニ觀ルノ字ハ唐書畫ニ限ル様ニ存申候。日本人ノ書畫ニハ題簽位ニテ可印奉存候。且又狩野様畫ハ小子一向存不申候。存セヌコトハ誰モ知テ居候間、却テキスニナリ可申候。頓首

十一月九日

註1 書簡五と同じ筆跡・料紙より五岳と判断。



(149×357mm)

七 草場佩川

(封筒)

時候寒冷ニ移候處、愈御栄迪被成御興居奉珍賀候。御孚
 嘱之認物、先般境屋迄差出置、定而無疎御接□□³はんと
 料直仕候。其折甚不承ニ而相添候無牘ふつゝか之至ニ付、
 少々取繕別紙此節幸便ニ相托申候。原紙ハ速ニ御投火可
 被下候。御掛幅等無別条御入手被下候哉、御尋旁草略是
 のみ、御寛恕可被下候。頓首

菊秋下浣⁵

草場礎助

千原太郎兵衛様

註1

表には安政二乙卯という年号と二人の人物を朱・墨・緑の
 三色刷にする。絵は大小暦になっており、右の人物は「正・
 三・四・七・十・十二」の月の、左は「二・五・六・八・
 九・十一」の月の月を隠し刷にする。

2 佩川の安政二年の日記『雲点留影』（以下『日記』）八月

十五日の項に「発答日田千原八郎兵衛書牘、挂幅画絹等付」とあるのと関係あるか。

3 原簡破れ。

4 『日記』九月二十二日の項に「千原太郎兵衛へ改遣ス尺牘写封」とある。

5 註4より安政二年。

6 千原夕田。商人。太郎兵衛は通称で後に藤右衛門と改む。

名誠、字明卿、諱鎮誠、別号放浪子・自適斎など。豊後日田の人。広瀬淡窓門。掛屋兼用達の丸屋当主の長男として生まれるが、元治元年頃家業を弟華溪に譲り隠居する。詩画をよくした。天保元年二月二十日生、明治二十七年一月五日没、六十五歳。



(185×48mm)



(173×352mm)

八 草場佩川

千原孝太郎¹様

別封添

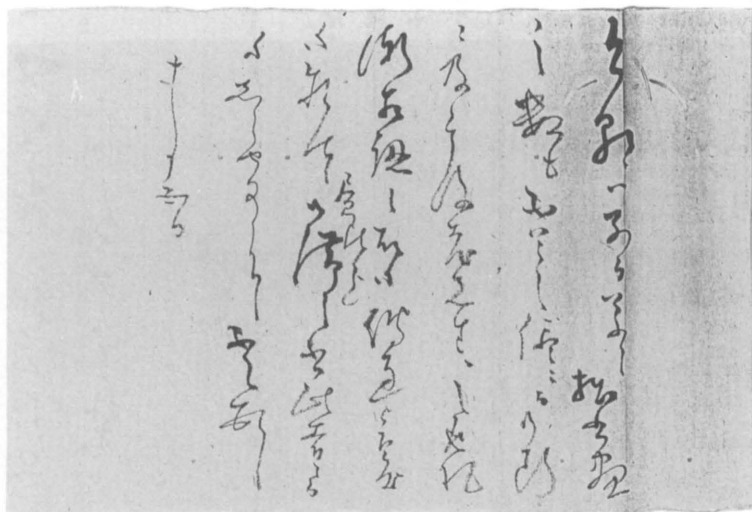
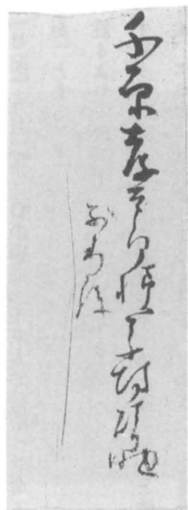
草場礎助

今朝ハ別而草々。拙書畫之數も不足之候ニ而御断ニ及、
其後老先生へ之返礼漸相認候故、御傳通被下度御頼仕候。
昼比迄御滞候否、此者ニ而御しらせ可被下候。不乙頓首
十月五日²

註1 未詳。書簡七の千原太郎兵衛の縁者か。『日記』八月五日

の項に「一、千原孝次より詩画頼来、潤筆五百疋」とあるの
と関係あるか。

2 安政二年か。



(152×251mm)

九 「草場佩川」

追啓

一、耕牛圖 掛物一幅

右者空帟之處ニ愚賛を認可申やらん。相疑候へ共、古圖輕易ニ難汚、別紙ニ相写、鳥度賛之一絶をも相副置申候。

一、耕牛 一帟

即前断の也。

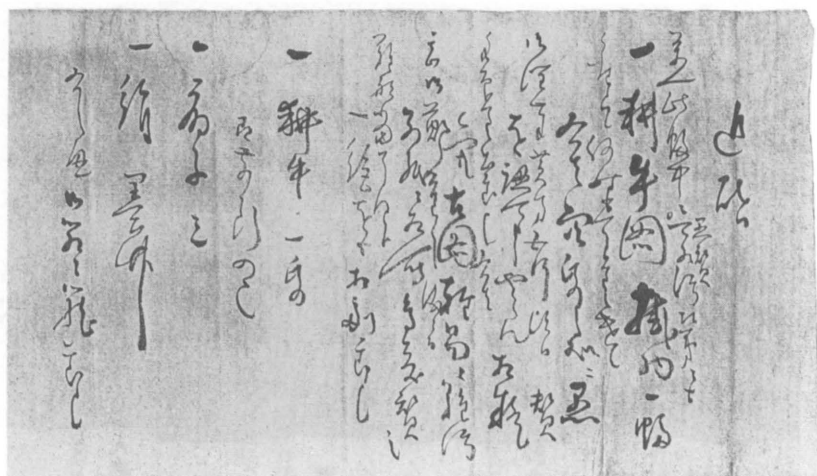
一、扇子 三

一、絹 墨竹

右之通御箱ニ籠置申候。

萬一此幅中ニ愚賛相汚次第二も御座候ハ、何時も可被差遣候。御潤筆黃方五行、頃日手印差出置申候。右者甚御鄭重之儀ニ而難承當奉存候。

註1 『日記』八月八日の項に「一、為日田人摸古法眼耕牛図二道」、また同十日の項に「〇三写耕牛図、一、日田人所索、絹幅画竹扇面三・一書・二画」とある。



(145×250mm)

十 職仁親王

弥御無矣候哉。承度候。抑明日御当座候。御参候哉。愚詠如例頼入候。今日家法楽一覽なされ候ハ、可給候や。恐々頓首

六月十八日¹

職仁²

武者小路前大納言³殿

職仁

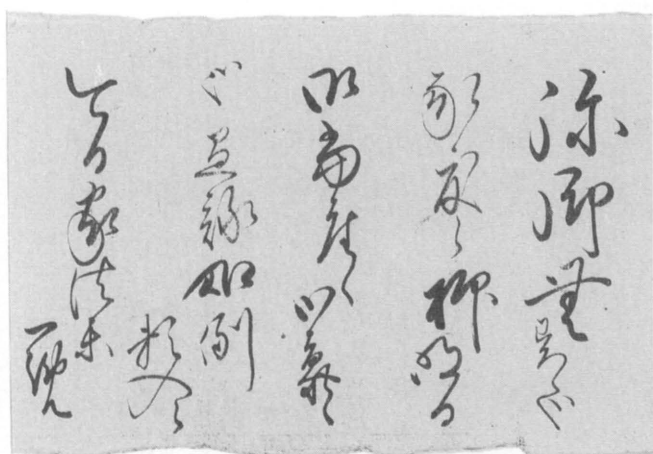
註1 『公卿補任』に拠れば、宛名の武者小路実陰（註3参照）

は享保九年二月十一日に権大納言に任ぜられ、同年三月七日に辞している。それ以後没年までの間、本書簡中に「明日御当座候」とある、六月十九日に催された当座歌会には元文元年六月十九日に桜町天皇の御所で行われた「公宴当座」があり、職仁親王、実陰ともに出席している（宮城県立図書館伊達文庫所蔵『禁裏仙洞御会留』）。以上から元文元年か。

2 職仁親王。歌人。有栖川宮第五代当主。靈元天皇第十七皇子。歌道は父靈元院と烏丸光榮とに教えを受く。また書能くし、有栖川流を創始する。正徳三年九月十日生、明和六年

十月二十二日没、五十七歳。

3 武者小路実陰。歌人。歌道は靈元院に教えを受く。寛文元年十一月一日生、元文三年九月三十日没、七十八歳。



(178×518mm)



十一 岡本豊彦

夜前者御光来得拜語大慶奉存候。今日ハ弥御發駕と奉存候。御約束之押繪出来仕候間、為持上候。御落掌被下度

候。別二堀越氏・大平氏江之遣候書状并紙包甚御役界物

之望待宜御達し可被下候。福澤氏御帰国候ハ、御序ニ

宜敷御傳達奉願候。此度者書状差出し不申候。跡より萬

々可得貴意、何事も宜御含奉頼候。天氣も定り候哉二奉

存候。御道中無御滞御帰宅奉禱候。恐々頓首

六月十七日

岡本豊彦¹

山口休太郎様

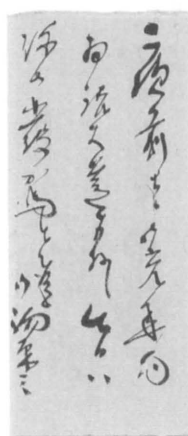
尚々夜前はいろく奉存候。

註1 画家。字子彦、諱豊彦。通称司馬。号に紅村、鯉喬、澄神

斎など。備中の人、のち京都住。円山応挙門の月溪に学び、

殊に山水画に盛名があつた。安永二年七月八日生、弘化二年

七月十一日没、七十三歳。



○当八月廿日帰家ニ付兩國柳橋萬八楼ニ而大會相催申候。其節之配碑⁷差上申候。御一笑可被下候。御序ニ雲嶺子⁸へも、宜被仰達可被下候、奉頼候。此段可得貴意、早々如此御座候。乍末毫御貴族様江も厚被仰達可被下候、奉願候。期書勿々申上残候。恐惶頓首

九月十三日

大西圭齋

大塚荷溪¹⁰様

几下

尚々、五山堂当年之詩話¹¹、定而御覽被成候。都下今秋晝会日々御座候。又盛事ニ御座候。其邊御風流承知仕度奉存候。猶近々可申上候。頓首不備

註1 増山正寧か。第六代伊勢長島藩主。号雪園。父雪齋とともに

に画名が高かつた。天明五年十月一日生、天保十三年十一月二十五日没、五十八歳(『増山系譜』)。

2 春木南湖。長島藩士・画家。本姓は結城、名鯉、字子魚、

通称門弥。別号幽石・烟霞釣叟など。江戸の人。山水・花草を能くした。宝暦九年生、天保十年四月二十五日没、八十一歳。

3 春木南溟。長島藩士・画家。名秀熙後に龍、字敬一後に子

緝。通称卯之助。別号耕雲樵など。父南湖の画法を襲ぎ、山水・花草を能くした。寛政八年生、明治十一年十二月十二日没、八十四歳。

4 菊池五山。漢詩人。高松藩儒。名桐孫、字無絃、通称左太夫。別号娛庵・五山堂。明和六年生、嘉永二年六月二十七日没、八十一歳。

5 大窪詩仏。漢詩人。名行、天民は字、通称柳太郎。別号瘦梅・詩聖堂など。明和四年生、天保八年二月十一日没、七十一歳。

6 江戸柳橋にあつた万屋八郎兵衛の貸席兼料理茶屋。書画会が多く催され、文人墨客で賑わつた。

7 書画会の目録。

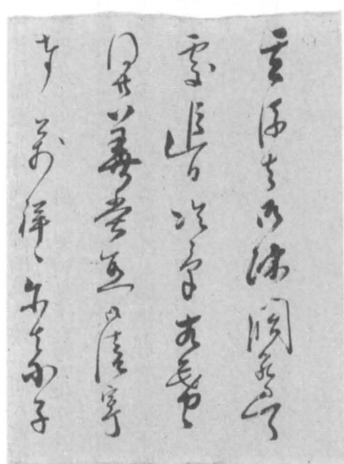
8 石野雲嶺。漢詩人。名世夷・彝、字希之。駿州藤枝の人。安永七年生、明治三年没、九十一歳。

9 中津藩士・画家。名允、字叔明、別号に一蓑烟客など。江戸の人。谷文晁門。花鳥を能くした。『五山堂詩話』巻五(文化八刊)に「小不朽社」社中として名がみえる。安永二年生、文政十二年六月十一日没、五十七歳(『慊堂日曆』)

「天保八年五月二十四日」の条)。

10 画家。名正弘、字風曉。駿州藤枝の人。画を父龜石に学び、のち匂田台嶺等に従う。また漢学を柴野栗山に、詩を菊池五山等に受け、多才を以て聞こえた。その居を香遠山房と称し、東海道を往復する文人の来訪も多かった。安永七年生、天保十五年二月十七日没、六十七歳。

11 『五山堂詩話』。菊池五山編。正編十巻は文化四年から文化十三年、同補遺五巻は文政元年から天保三年までに刊行された。※揖斐高「五山堂詩話解説」(新日本古典文学大系65『日本詩史 五山堂詩話』所収)参照。



(161×1232mm)

子に無き地止宿
 由係主見日尋
 山に水あり
 名家
 五山
 西園柳橋

梅
 配
 山
 名
 西
 柳
 橋

大塚有溪侯
 下
 五山寺
 詩信
 都
 又
 手
 手
 手

十三 古屋鼎

一翰致啓上候。然者御同苗様先達而より御所勞之處、御療養御協不被成、御長逝被成候由傳承、氣之毒之御事奉存候。高堂様初御愁傷奉察候。時候寒冷ニ趣キ申候間、御居喪中御自愛專要之御事ニ御座候。右御悔為可得芳慮、如此御座候。尚期嗣音之時候。不具

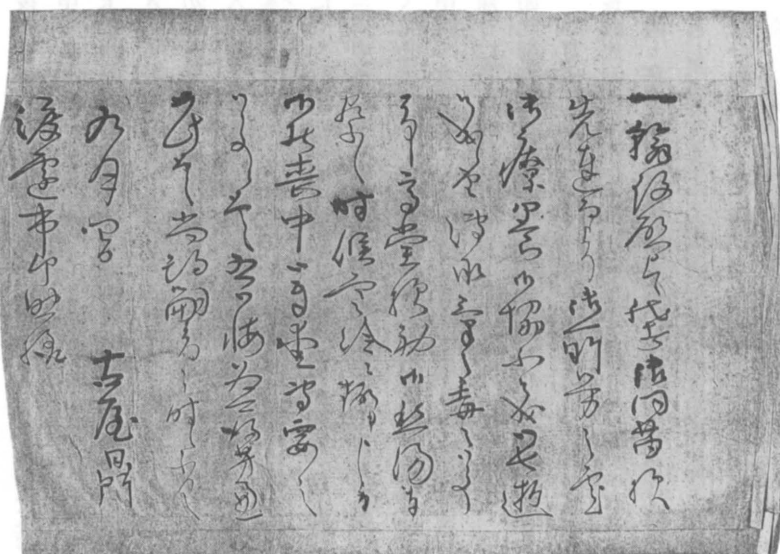
九月四日

古屋鼎₁

渡邊市郎助様

註1 熊本藩儒。名鼎助、字公饒、号愛日齋。秋山玉山門。享保

十六年二月一日生、寛政十年一月二十二日没、六十八歳。



(157×278mm)

十四 中島広足

□御安泰被成御入奉賀候。爾来ハ申訳なき御無音仕候。愚老もとふかこふか取つゝき滞崎仕居候。連中会ハ日々繁昌ニ趣き大ニよわり申候。御地いかゞ、御連中皆々壮健と奉存候。横田・小山³定而旅行なるへし。安田⁴ハ不相替繁用なるへし。○奉願候事左之通。○朝野群載⁵定而館本⁶などに候はん敷。此内ニ第三ノ巻遊女記⁷と申一条御座候。何卒乍御面倒、其一条はかりを御書抜御恵ミ被下候様奉願候。ちと無據入用之事御座候。○蓮臺寺⁸松垣塔下ノ柱石ノ四角の所、どちらの方やらに蓮花を彫たる跡の少しのこりてありしやうニ覚申候。弥ありしにや、なかりしにや。何卒一寸御吟味可被下候。○木原山⁹を鎮西八郎の矢を射こしたるといふ傳説ありしやらん。御聞及も御座候や。右一寸御しらせ可被下候。○去年来被遣候もの、つくしうた集¹⁰入分、詠草皆々受取申候。拝見加筆之御詠草ハ皆々返上仕候。相達し候哉。一度ハ正月初旬に敷、江上勘右衛門¹¹の長崎人¹²と申ものに相頼ミ、御國便ニ出し候。後又御詠草百首敷之一冊ハ、大坂のもの兼而肥

後へ往来いたし候而、古町岡崎惣七郎方へ出入之源六と

申す者袋物師也ニ相頼ミ候。是又相達し候哉。○此節紀州鯨

玉集11四編上木出来仕候。御國にては素當12沢山入候。此事

きかて黄泉におもふきしこそ残念なれ。御歌先年御詠草被遣候分ナリ

勿論入置候。次に伊豆足13も二三首入、高瀬文平14も三四首

入居候。此人々へはやく御しらせ可被下候。岩崎正澄も入、又外ニ

肥後某トアルハ、タレナラン。右四編日本大坂書林にて江戸も京もいつ方

にもうり出し候間、御取下し御覧可被成候。三条目橋屋

ニ御申付にても可然候。猶又五編目入哥遣し度候。彼つ

くしうたの御詠草に、君モトヨリ、小山も其外も遣し可

申候。木原連16へも御申遣し可被下候。猶又御留守居小島17

帰りにハ瓊浦集18其外も上木分入御覧可申候。餘ハ後便と

如此御座候。頓首

二月十七日19

中島廣足20

長瀬武室様21

尚々花盛も雨勝にて候へハ、早散初候。只今隠便中い

としつかなる事ニ御座候。御留守居交代便ニ熊本製に

ほひなしのびんつけ、少したまはらハ難有からん。長

崎のびんつけハくされからいものにほひにてよわり申

候。女の註文の様なれとも、外のものたまはらんより

は。○御詠草とも皆々返上相濟、今ハ何も一冊も一葉

も無御座候。桂楓22一冊今暫留置度此儀御許可可被下候。

註1 前欠。

2 横田巖正。熊本藩士。通称勘左衛門、号川別。長瀬真幸門。

寛政二年生、弘化三年正月十五日没、五十七歳。

3 小山川蔭。熊本藩士。通称一太郎・多乎理、号栗屋・栗園・

聴雨等。長瀬真幸、中島広足門。文化十三年四月二十三日生、

明治二十九年九月二十四日没、八十一歳。

4 安田貞方。熊本藩士。通称市助、号養素堂・逸洲等。長瀬

真幸・中島広足門。寛政十年生、明治十二年七月十九日没、

八十二歳。

5 漢詩文。三十卷。三善為康編。長承・保延年間成立。卷第

三文筆下に「遊女記」を載す。広足著『遊女歌抄（白女考）』

にこの「遊女記」を引く。

6 時習館本。『遊女歌抄』の引用の末尾に「原本、誤字多か

るを、群書類従に出せる此記と、伴信友翁の写本、又、肥後

学校写本等をもて、校合して、異同を記しぬ。」とある。

7 長崎県立図書館諏訪神社文庫『檜垣姫家集補註附録いにしへの遊女の事』に「遊女記」の書写があり、末尾に「右記文雖有誤字脱漏護不改作應需于書寫之且中島君膝下 長瀬武窓」とある（岡中正行氏御教示）。

8 浄土宗西山派の寺。檜垣姫伝説と檜垣塔で知られ、檜垣寺とも称される。現在、熊本市蓮台寺町。これについて、広足著『檜垣姫家集補註』に檜垣塔及び蓮台寺周辺の図を付した詳しい記述がある。

9 熊本県宇土市と下益城郡の境の山。鎮西八郎源為朝が九州征伐の際に城を築いて居り、飛雁を矢で射落とす故に雁が峯上を避けたことから雁廻山の名がある（肥後国誌）。広足は『檀園隨筆』でこの山の名に付いて述べ、「射こす」という説は付会されたものとしている。

10 伝存未詳。広足の著作に付された「檀園大人著述目録」の一つに「つくしうた全三冊」とある。

11 類題和歌鰻玉集。歌集。加納諸平編。七編十四冊。文政十一年（嘉永七年）刊。和歌山総田屋平右衛門版。第四編は天保十二年一月、第五編は弘化二年六月に刊行される。

12 本間素当。熊本藩士。本姓樋口氏、通称忠助。一柳千古・

長瀬真幸門。天明六年十一月一日生、天保十二年正月八日没、五十六歳。

13 和田巖足。熊本藩士。通称震次郎・真震、号釣龍翁・弓削弓八。長瀬真幸門。天明七年生、安政六年四月二十七日没、七十三歳。

14 高瀬隆輝。熊本藩士。別名美奈和。文平は通称。長瀬真幸、中島広足門。万延元六月十四日没。

15 『鰻玉集作者姓名目録』に「正澄 肥後益城郡岩崎淳平」とあり、熊本大学図書館永青文庫『町在』に河江手永会所下代としてその名が見える。天保三年に五十一歳。

16 木原楯臣か。熊本藩士。通称英太・楯太、名真足、号藤園・修武堂主人。長瀬真幸門。文化十二年生、慶応四年七月十六日没、六十四歳。

17 小嶋安雄か。天保十一年名跡相続。長崎留守居は安政二年より勤める。文政二年生、明治三年六月没、五十二歳（服藤弘司『大名留守居の研究』創文社）。

18 歌集。二巻。中島広足編。天保十一年刊。

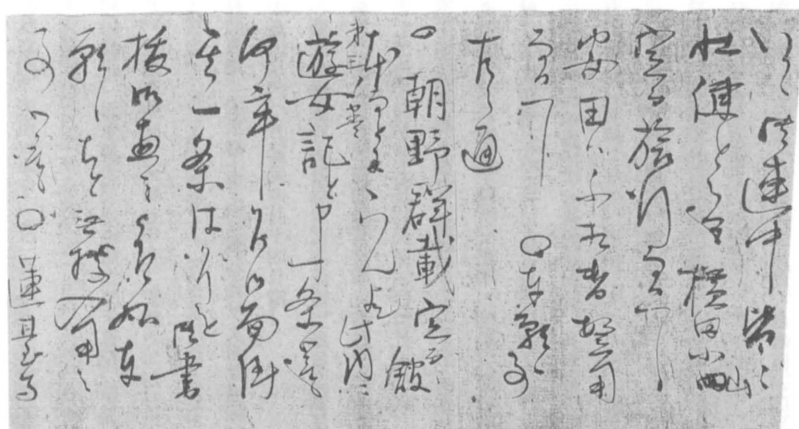
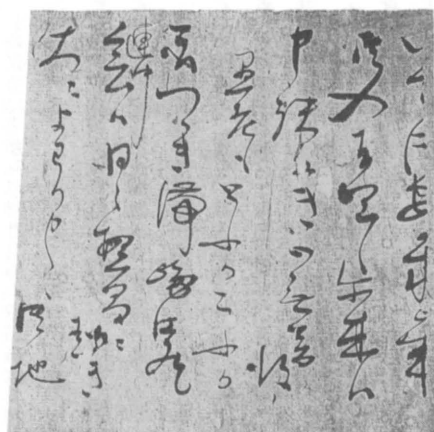
19 註11・12より天保十二年か。

20 国学者。肥後藩士。通称嘉太郎、名春臣・広足、号檀園・

黄口等。長瀬真幸門。三十歳の頃より長崎と熊本を頻繁に行き来する。寛政四年三月五日生、文久四年正月二十一日没、七十三歳。

- 21 『鯉玉集作者姓名目録』に「武室 肥後家士長瀬助十郎」とあり、熊本大学図書館永青文庫『先祖附』に、長瀬真幸の嫡子として名が見える。文化十二年御目見、慶応二年六十四歳で隠居。

- 22 『桂楓集』。漢詩。七冊。安野南岳著。



(181×1825mm)

松恒塔下ノ榎石角
 のふちの方や蓮
 花を彫り移し
 ついてはヤリ
 中いふあり
 るに可なり
 山と瀧西八景の矢
 と射るなり信後
 ありやふなり
 右子云々
 〇去年一斗と書
 ころゝ集又後学
 皆くあるに
 等しく海子に
 等に

石られあはし
 一巻に正月
 江上勅ち
 りの「五」
 外、後又
 るそん、一
 の「あ」
 古町岡
 七郎、あ
 障者、あ
 あはし、
 鶴玉集、
 外、あ
 素南に、
 あはし、
 歌、あ

年次 伊豆 是

二三子
曰子思
曰子思
曰子思

山石

又仕て居るに上りて

同
本
大
反
書
每

子

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

三

三子自校

子之

又子編目入三

彼子

以爲字

外七考一

本可

連七ハ中七

移文小島

瓊南集卷之五

本
分
入
西
色
下
下

金上金上

卷之四

卷之七

॥ श्रीगणेशाय नमः ॥

1

世系圖

自
心
書
曰

[illegible]

卷之五

陰

12927

〔礎稿作製者〕

飯倉洋一・井上敏幸・大庭卓也・樗澤葉子・勝又基・亀井森・川平敏文・康志賢・関澤智子・園田豊・高橋昌彦・中野三敏・中村恵・盛田帝子・安永美恵・吉原幸恵

●前号（中井董堂書簡）解説補遺

前号掲載の中井董堂書簡の冒頭の解説では、宛名である「豁如」「菜花」「無染」等に関して、専ら書簡中の行文に拠ってその人物関係を憶測するに留まっていたが、ここではその後知り得たことを記して、その欠を補うこととしたい。

「豁如」（豁堂）は、董堂書簡の文面から、菊池五山入門のための束脩を董堂に尋ねていたことが窺えるが、こうした五山との関係から見て、東叡山寛永寺養寿院住持浄海の遺稿詩集『五楽斎遺稿』（文政八年序刊、一卷一冊）の編輯者として五山と名を連ねる「豁堂僧亮融」であろう。

該書は文政八年の亮融序、同九年の五山序を備える。亮融序には、浄海の示寂後、亮融が浄海の詩稿を五山に示して遺稿集の編輯を持ちかけたことが記されており、その成立経緯を窺い得る。

はつちをさふふはつち
 能く製びしつ
 かゝるまふふはつち
 五山 七巻のひ
 七巻のひ
 うふふふ
 のほろろふふふ
 あまふふふ
 〇〇ふふふ
 五山 五巻のひ
 一巻のひ
 桂根 一巻のひ
 五山 五巻のひ

冒頭「五葉齋淨海上人字法帆者、我同法門侶也。（中略）嘗住東台養壽院。既而退院、放浪山水逾二十年、再歸東台。与余交益厚」との言から、亮融も淨海と同様寛永寺に關係する僧侶かと見て同寺關係の資料を検したところ、『東叡山寛永寺子院歴代主僧記』（内閣文庫蔵、写本二卷二冊）に、春性院第十九世住持として亮融の名を索め得た。また『遺稿』には、亮融との唱和詩が多数録されるなか「正月廿八日、菜花樓看梅」と題する七絶が見える。「菜花」は恐らく亮融の庵号の類であらう。

亮融が五山とともに『遺稿』の編輯を行っていたことは即ち、亮融が文政八年頃には既に五山に師事していたことを語るものである。その証左としては、五山が『遺稿』に序を寄せた文政九年刊行の『五山堂詩話補遺』卷三に「東台詩僧近來、以淨海字法帆ヲ爲翹楚ト。法帆住持ス養壽ノ。閑退之後、吟咏自樂。飄逸瀟雅頗ニ其致ヲ。（後略）」と淨海の詩篇數首を抄録し、その次の條には「同社一時傑出者、亮融号ニ豁堂一、亮長号ニ茗谿一、孝信号箕谷。皆余生平ニ忝ニ方外一交ヲ。（後略）」と亮融を紹介しており、この頃にはその詩才を相当に認められるに至っていたことが思料されるのである。

また「無染」に関しては、董堂書簡から亮融周辺に在った人物

と思しいが、先の『歴代主僧記』にその名は見えない。但し『補遺』卷二に「甲斐僧無染、名ハ翼、字ハ東鶴、号ニ松廬一。住ニ其国萩原一法正寺一。往歳遊ニ南紀一、入ニ春川一、南嶠之社。戊寅夏、介ニ南嶠一書ヲ而來見ル。（後略）」との記述を得る。春川、南嶠は各々、川合春川、崖南嶠。共に和歌山藩儒。『詩話補遺』卷二は文政五年刊行と推定されるから（新日本古典文学大系65『日本詩史 五山堂詩話』所収、揖斐高「五山堂詩話解説」）、文中の「戊寅」は恐らく文政元年、この年に南嶠を通じて五山と会晤したと言う。以上、断片的ではあるが若干の資料を提示して補遺とする。

（大庭 卓也）